兼倍卿

三

和書門
類 一七二〇四 號
二一七 函
四 架
八 冊

内閣文庫
和書
類 一七二〇四 號
一九九 函
八 冊
八 架

内閣文庫
番號 和 17204
冊數 8 (3)
函號 199 214

国立公文書館
National Archives of Japan

和學講談所
浅草文庫

抑儒といひし哥道よりさきあるべきことわり
なるべしとのたまひしよりもさきにあ
りとなげいて儒とかやせり此よりして儒とう
たへんと思へる人々哥道なしていかるべきか
ゝ哥道をんなげき事かんよりさきに哥道を
き人のうるおい皆そはなるべき事をゝびかゝ
ことおもひてかゝるいなるものをまねこ
先哥の道ひ物にあ道ハ月花をゝんても西行法

風は吹かもむしの音のすさまじきを聞て物
おもうやうとなんと付はへしと思ひ合せてそうこい
拾一しかの面白きこと仮にんうけうへと何時に
も寸貴人言人は御所方は時も俳うしよう
はまうすれにふれ書うこひはあるあく光一
に字をもかいうう字うつりのくちめゆま
るかるもつといるくるあけさけ一字つめ二字
め三字あるとと三字さうとこうひきりおうり

ならぬかたりとあるとと拾よきうてきうす
かなりわうもるそ外次第道行付かせ
まふかるかさ教さしと一せひ小儒多こ
と繁曲章あけい俳人き入とあひれ儒あと
きうとかくのとくれ儒とけこれたのよそう
たかといへとも人を主りてうたふ人かとれ
はこと多をうひけかを者たしをうたすす
定一のあうひく又十鉢とこすあそあ所りい

らう物しかう上のすへめて御命さうをとんん
業にハ書れてたくめ書くこと事をとうこと
とけ給へ申りうきとこすかゝ御やうのす
あらくこにあらすこれ家くめ式
一五せいくの御乃事
正月ニ言麻毅波をかゝ松をいと
ひうる御へ物まに子乃日の松てこと
并給ふ万人の家にハ松と門ふいと并ニ事松

ニ子の花ようひをたりつをとこ事めて
枝葉れかゝ事もなれいひうゝ給くれ
さひりのさすうホニ也ふく面はまう
事をなく言葉をもいて使す言中ハ言
同ち言葉をいくくりやきんとうやう
小松ニ結ばれうちめて見ぬ変なかるう
少へよりて正月ニ万人の門小松をいと并ハ
きうとひき年徒の神とうんまやし人ハ

を松のようしとたりけるとて毎月初ごとに
をとこふ紙よりて写板に松月貞度いく枝
ほどる能をかく物ゑに色を塗そあとかりとは
不多このいくさもつまれ松におりて又多ふもの
ここもちれ主子の心位あるそひあり時くく
さいこくすりとにんとい心底さ心人は国ふさ
ちなにとれ世よ御代をゆたり始て我ち
やういよくあんせんなるへきすそうそんやふ

分の主るとちなふふの世子御位小はさ始ふ主府
世そくいあり月てかの雑彼の梅多こそりして
さくさうもの方をさうと咲それ松横
小梅と心ゑくを名ゑり哥道ふを花のあふと
中て梅と結ゑの花のそつあそなれかく
くい物ゑよをとりちいくを塗と云ふより
おそふふよりてなふを結の哥をりちいゑ
もつの梅を塗そあようたふく

一三月三日桃とゝのゝ祝ゝ云なをはせいつゝ
東方さゝくしのもゝの御子ハ双御
一六月の日かきつゝたゝくゝ
一七月七日七夕彩うゝれ曲車とうゝ
むゝ御こゝろいゝしゝくゝやゝと云ゝふの
人ゝかのゝ御月を御ゝ彩ゝりしゝ夕ゝ
月れ御ゝと行ゝ曉し入ゝの月をおゝて
たゝきゝるゝあゝりゝかゝるゝとなゝかゝきゝ

御ゝ月とゝおゝり彩ゝ御ゝりしゝ一彩ゝよゝりゝ
二人のゝものゝ世とゝうゝくゝ後ゝれゝりゝこゝなゝり
ゝんにゝ海ゝ言れたゝるゝゝ色ゝ今ゝ七月
七日の和半に一度のゝちゝとなゝ彩ゝきゝ
ゝかゝゝゝに七月七日小舟とゝ彩ゝ
彩れたゝるゝゝたゝけと年月ゝ彩ゝ
遠ゝゝゝゝとゝゝゝ文彩ゝ乃曲車を
ゝしゝゝゝれ事ゝゝゝふゝゝ彩ゝ

の曲輪ともうしあつ

一九月九日にふぎつごうとうしあつ

はるくさのはぎつごうと云へありさるる子細あり

てしてうえ山かなりされはかのぎつごうしうん寄

きやうれいくの意紙彩りどもせしうきさ

にもさ菜は谷中集つさこの水をかくしセ百

葉とたりうもはとしうれ生てきくれお

なれあるこのはふ彩りつれ菜と命月お

度うきいこ九月九日をいうふせりくこ

かうゆへにきくの月命ひくなれこ

ぎつごうとうたなこ

一かどおの徳しうしひもと戦もおひもと

うかくおひもとやそかへ所と云徳こ

一加中むこうりあへのうこひく徳ひもへかうす

かこいそのうたひとふうりそこもしかへと

ひこ云事と言うふ徳こむりあうれ徳

と賀の祝言と高砂のうたひとをかなでり
色相生と云ふこと

一 さて海の德乃すゑひろく大事と
いふことはけんまく德の間は大の
新の為事よりおんうたひとうたふ
ましきと側をも双側と用と昔ハ人きと
水性をれと用い作う為代と水も大とをり
人ハ大事の乃異とて色紙つゝく双相に
定し双側ハ去れ側をとまきと四季ハ春
のちゝめをれと色賀一の祝言ハうゆゝ小家
れたゝめにりらゆ又いとうく双側と本性ハ
ちて家よさゝ和れ側ハ中と色と彩せり

一 船中の業れ祝云ハ去移ゝうの曲年屋ゝら
れきりく

一 哥れ合連歌れ後ハ人徳色ハ人ハ
れ曲業色ハ紙ハ倡ハきのつゝゆきハ世小か

それなき所の名人すべ仏法をうけた
まりていまの人へ今の言ばを聞くと
集を作る元亨一代まで聞かれしまま
て所のこれをいにくい古今集よこの事ハ
かるゆへよ所道のあるそひの後ハ曲事と
ゝいとあり

一 丑寅ハ世を儲ハ大事をこに言もの不思
議ハ先ハ寅ハ後ハ丑ゆゑ丑ハ寅あ

いまゝ形曲これ物の変のうちを仏神今
世ハ不儲ていたゝくありとも寅に儲
命ハ人ハ寅ハ寅たゝくゝ寅ハ儲而
白ゝと云事ハ寅ハ百事をとて寅
ハたん寅心ハ寅ハ先ゝと儲をう
ゝいたゝくゝ寅ハ本の道我
ゝ事ありゝ細ハ人に物をゝ我
義あゝ寅ハ事ハ唯一切

れ間物いきて果てし我う藝をおしさけ物
心よかへりとゝのゝもの物とゝ事ゑ上ものれ
ゝきゝ古言よりゝゝたゝのこそゝ上ものと
れかゝりゝれやゝしそゝつゝもゝすれされい
ゝり物いゝれゝりたゝゝと屋敷ひゝ寺徳も
吉出れ徳成事とやまひこせり地しい後
しありたゝふ徳とゝ先大作のゝくよて
まりゝくゝゝきゝゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝもすくなる道とすき道ゝ云山坂ありゆゝも
たるゝゝいあきき道ゝいゝゝ徳もゝふゝゝゝ
ゝくなりゝ有ゝたゝゝゝ一文字大さる
ゝゝ徳ゝゝ字ゝ文字ちゝさけゝも徳必ゝ
ゝたゝきゝかゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ大ゝちゝひゝ物にたゝゝ
糸れ細きゝ上ゝつゝゝゝれゝ
深文もすゝいたりゝと文ゝにゝのゝも

も下れあり給へ深くうつくしかりしかし
古人の書おられし書面より德とはしたる地と御
書ともかくれたるこの儀に先德に心うけん
れもたる所道れ人なくこうこひ面白さ
云事と云りかたくたりそ面白德と
常よりに拾て用れ吹ふも面白ふも心とうけ
あり面白やし稀人に月花もとあてもはりし
あるを德ともものにりちうへし俄よ人の御ふ
方の内をれのつう時ふ似相ふうう心はよ
拾く古今れ序ふも和哥とその稀と云ふ法
けを花と云うんよひくくありか稀の云義を
は德りんるうしや只てうちうに云うん
とおりふ常に拾ト又くは一つもいやく百年よ
ゑうんとおりふ人すて藝とさりひ拾く別德
拾りをれ屋にうひたき物ふそ梅ハ限て
ふこひて枝つきも更よりさふ花ハ又こ

海やうに考へうつくしを自ひすとれうの為は
て人のうたふへき事只大和言葉にて歌かく
くのうなる事と風ふ分てもせうくの稚古
をいふ歌ハすきもあきも我ものさ分掛
をて人のすめこと事すて文よくこと為ものと
す文遊ものを別ゆきとへて遊やしてきてひ
とへと又如安一又ハ言にのられ遊ものさまりたる
俗よとへとも人常よめられ変をさめすとへも

ハ言ふのられ変の道ひとへ人ものさ変れます
をてこ海うに遊分しきうをひをてハ分かくハ
俗未世ハ言ものりたる者をもうの為百ハ言遊
りけしをいるさ事ものりめうの事ものを遊
一実一稚云ハ曲味をたとへて年ものめのはの
こひているうとをそこ海ものさ事をく
只稚云と一世いをるのうくこれハ曲に文に人
なるのう事なく心にハ稚云をかくを変をも

いろいろと家性たくしをすることなれば
左ゟ　第代と松にゝ家とゝいはれけるかゝ
ちとせのうちはとゝ海とゝ
ゝ
夫人間は神代ゟ天地ひらけ国おこり
あるのこゝろこのとくなるゝ二柱の神宮ふ
八洲乃国と化生をくきをれや大君(キミ)はみけ
長国ゝ御とゝやあとにすゝるの業ゝの神
恵くゝ生ゝくらゝわ形ゝれとなるへきう
すうゝやゝうの里れ交化おかゝられけ
たくゝ雲れ上なる玉敷の月もひりゝやこゝらを
右北大少いつき同
一
宮二ゝ宮人は曲味しゝをとゝ守ゆゝ
ゝんゝ云すと人毎よすゝをたるゝ心ゆゝる
元大きなるひゝ事ゝ花山よゝ今日と言ゝ英
林よいゝりて家ゝと言ゝゝ小ゝゝゝゝ
小ゝ後ゝゝゝ一ゝゝ拾これ心とゝ

行別所へ毛ホハ又ロ俗なてハみてこ成ゑ毛
ゆ〻ゑんとゝゝとゝて引とゝてゑ〻とそゆ〻
くゝうたふよハあ〻寸心れ〻ちよゆ〻とりち
徳にハちふ〻ふ〻ふとゝいつゑ世氏とゝゑ毛只猿云
れのゝ〻ゑ〻ゆ〻ゑ俗ゝ世れゆ〻ゑんゝ物ほゆき紙
ゑとゝゝゝゆ〻ゑんの二字ゝ〻ゑ〻ゑ〻ゝ

幕　まゝゑうんれゝ野乃ゑのゝさゝ〻ゑ〻ゑ〻

花乃雲ちゝ春れ明ゑ乃

さなきたゝ物れゝ梅の兼れ人目まれゑ〻
ゑ〻寺れ屋の松風文すきて月毛ゑ〻ゑ〻新毛
乃ゑ毛れゝ〻ゑ〻ゝを毛のゝ〻ゑ〻ゑ〻ゝまゝ
て〻ゑ事なゝて〻ゑ〻ゑ〻ゑ〻京何ゑ毛ゑ〻
てれ人よハのこ俗世の中れたゝゝゝとゝち
ふたのむ佛のゝれゝゝゝと道ゝ法れ多
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

冒れ秋のそら松れ夢のごとくゆき過ともわれ思ふ
いつくもさもあなき世の夢ゝ何の言ふかあ
てまつり

一 歌三まいかは曲味しいかのゆくえのかくな
るとも思ひと思ひ曲味切ゝ多くゝ家安
れ心ふすわりのうら姿あたすくやうにおたとか
うこと〳〵いやしき世乃人よ屋うと思とふん
とそ俄よ川はうひ言に方拾あて心はた

ゆはまんかれ曲れおれ仰ふう心乃切なりことは
屋ふうとも歌はまとも歌俗めい仰なるゝ
れ稽ふいとなくすうくゝあかうちよ心乃浦の
あうとれて必はれの和言をあくゝと笑とり
かうりたうとうすとも物すうくかとうてき
事乃元道理れ用ふくゝ前ゆゝうゝのすもひ
にいまれ曙とゝしはまんれにも秋ゝ夕を
乃そひうとうれ稽乃事ふみまきやうあまた

ぞ〳〵偏に恋れと極めて相近く安さすく
一
土つのふれと久まよいてくりヨろ恋そ
春
ものや木ものとくへのこすまて
夕れ霞朔の雲いつ迄ろ思ひの書るゝねさひき
春なの梅の香立い弥ふれこにひきさけゆる
んとて別とのよりしてせあてねやりる月なか
も土とて松よのこすすて又ひとり秋よ春る
そや 土いちるこ立いよ松るゝ成れ

うへ迄ぬとゆの春すゝこ立まれて
夏もすすそれもおるゝ世のいのちのとさ
ゝもいけまて春れ家のまもひすまんさ
のかゝひそのつとうきれさめともたまう
きて侍へて久れ世まてりとんさにてを
日書れ秋ものさきかるゝとゝ久ゝすゝ
かゝるれとあゝと家かれ人たのあてこね
春を侍と迄ゝもらんかひよ立けゝてゝ

ぜそうなるもの迄ゝ夕言の秋風あり山
おろしあらぬもあの松とゝゝ言ふる迄我
まゐ人よりの言伝といひきう海ー せめても
のかゝるのあつさ身にあまれて風のたちこ思合
ゝも夏ゝやすきのまゝの梅風ひやかに吹
てたんせいの扇も言ふれゝゝと風もゝゝ海
くてきゝふうゝゝめりゝもゝ言た
あふうとれなるへきそのひゝふれゝと文せゝも

人ゝもゝゝむまゝたゝおもゝれ身のかゝゝ
ひけけてひゝいのゝ人ゝ海ゝ秋ゝゝ
かゝゝゝ迄ゝ人ゝ一大事ゝ首れゝ人ゝゝゝも
德なゝ秋ゝゝ海ゝゝゝゝれゝゝの口言ゝ
まゝゝれゝゝゝ迄ゝ人ゝゝのまゝ海きゝかゝれば
そのゝ細ゝゝりゝ人ゝゝ必ゝ迄ゝれゝ者ゝ
あて文ゝきゝれゝゝりゝゝれゝゝ文迄ゝ道理
ゝゝゝなりゝゝれゝゝ迄ゝなゝゝゝ迄れ

行なるの面白きこゝかなかるゝと連歌したちのゝ
一
されとわけ問ふしるくらるゝ人をへき物くせ曲
ハらん曲あり秘事くゝ

一
四口義傳
曲味くまれ花を皆ちりくよおそそゆゝ
れ風乃物をこゝきまれ物あるちの原けけこき
とへるうゝとくそあくゝ法の文とけくしくそ
たゝおくれあれるに出れ芸好すあるくなる

へくゝされくゝ法んかれ義傳の二ハ人百一家より別
なるくと人毎よあるゝ芸にうた物すをあるゝき
すくすくゝ多別をくゝ

古今
俳諧まや神ふくちに秋の歌
三ゝや美とうあくゝれ

さゝ地ゝ義よ芸をかれくゝ歌ゝにかたちな
くらゝをゝゝそふ風ゝくゝゝゝも松ハこ
たゝくゝと言あゝ何事も思ひたるゝ文も

曲

一生の風の前は雲夢は間ふさぬ夏とく三
ふしぬれうへのあるひとりの前よきこんこすい
らんてんの日よりいれあるのこゝはけひとい
のちぬれちかいろれくるんつきありとゝ
忘いくさとこそ書れ花所のかさんまとゝもとふ
おとろふるんつきれ物の物ひとり物よりあなた

意んとゝ春さり秋きこゝろ付て花さんす象
前ゝつり雨ふりたけをすてふさけく
かゝるとゝやくきこゝろ朝うれ花の上なる
春よりまゝたれさりのそわけうるのあるる
きのこゝちして世と物風れ打なひさもま
入たりの言をゝとゝくむあゝれなりこゝ分に
ゝいとい河ふとゝ道ゝつへき

一分五乱曲ゝ

曲をしたがひたる曲なり徳いまこいてうさぶる我
ふたりさきくうまそさにきれをたとへはは
をそろい庭の松をしぬかりかをてちをたとと
川延て又也なりを川ちめなとをとをとを物とを
ゆきうへをを面白しこををふをは道のひとを
たをををなるを他也ををを文ふ面白
かすに二業すりを物にそをちをを松の手を
ををくををこひたるこそ弥面白くををを也ま

くの宮をすてををしをそをいそをは
らん曲ををへき南向の徳ハ祝言すりをを菊曲
ふをりふを古今の中をれ事をを皆をくふ
をふ他世をををををは道をををる事も
をををき事をををる別をををを
古今
いをををを物ををひよりかをふ山内
む松をりをこをのもをを海を
ふをきをを物ををを桃をりをを別

所のりとと家と宮とて本源にとありけれ
よれそしおりしい御山の桃と志すくすれと
西王母ともらやます又りかふるあきな
れ母のりとられしかりとあとすふ人とうすか
くて三年のとかれむしくぬきれの月くれ
世代と母のとそのせんかんくすしうたい制の
うるさ小御山れむとみと浦れ月ともなの
めす志りん帝れ松りけの東の高にあとれ
あくかき事なすおきりかてへめも志てあけ
きりかりく
右代五言の事秀書志つと又祝云の御
れ十小大とつけうる事ハ日う志西の三字く
日う志西れ字とうとハすこと志西れ字ハたて
されと技二字のかりちんすとうれ変とと
みとく志西れ変ととおそく御山く世御
変とたとそけいきとたとそけ世横れ

ハ当道の謠小もたと又謡あやとゝなと云す
ありそもとう書こそいはれハ謡の文とん謡ハ
りんとはうと織物ハりもちたゝの文とあり
物くあやれりんと云ハ白きとりんとありあさき
れ上にれる謡ゆりんとありかゝ業れ文
ゆて又そのよりあるゝ文ゆて後と行うさきハ
ハ謡もあるゝ謡と二つよりけてたてすこと
謡とハ謡ハ又と行ゝ謡ハ謡ハ謡ハ謡と年とゝり

ハとすくるゝゝて常にんけ謡とゝ
たれねゆすて行ゝ心うけうとゝ

一

謡れゆりよとゝと云事ありそ連歌れゆこの
句下の句れんなりもりめとゝくゆりのもと
はゆるゝ十七字十四字れはけりゝ異別謡と
云道すりあるにすゝそ後事に行と月と
ゆりナセナ四と合三拾一れ数ゆゝとゆゝとゝ
ゆりあるゝゝにも数ゆゝゆゝゆゝゆゝ

発たるべき

一 かまくらの位と京都の位とたがひたる事

うけたまはるにまことなるべき用とおもはれ侍る前と

ますます後となるべき用と思ふ位と思ふ

色心字はりのべうなるにもてなされ位と

一 色と云たるべき心と合せんと天はたらき

心識もおなじ用又おなじ識わかせて位とも用ハ

心と心にあらしし識とてはうしなれ

心はかるべく他よりて心を心ぶかるべ

かるべくよりてこころかさと陽とうとうとを

陰と定め陰陽和合れんとあるべきとも

けさハ冬の日うかり世をも一年れうちふ

なるべき季とかわるべき季に合陰陽和合とて

へかり又いるべくはかりと上陰乃かりとも云て

一 はるとは立て相違候の事なるべ御ことあり

ぬてうるべへはけあるべきとと

御文字一行うまらかとおそく仕まつる方とある
しかるに遠州へんと思ひしに遠州へ行
もれ物こしけあひいうにもそくになさるよ
所はそうふやうに使へひやうたもじへ
り方よりもくくうひあとするみとはさ
なのうきり祝辱くたとひ方下ひよて法上る
かも方へいくへ契約法度よかきうす
法役去たよ何と上るはれもあひして定一人

下ひなりた方とうあかの先上ひれさる
法華なるも法華て方と二人してする法華を
時方よすれてりんくにつ道おそくとつ道
れかとすりせ海きこ
一遠州いさけきれ事女能みとたあくといた
とけく事又うきあ面こいきれけきやいか
小ゝ去りうよりきてます
一地遠と遠州扇といさうそよりちるめして

一 そもゝ〻れ抑をもへらく和歌のうへ
かすす

一 詞は一字にあ二字つゞめとゝ云事ハ一字にあて二字
にあるを一字にあて云又二字にあるを一字の物
にあと二字にあ〻ハ云事と云ふるのつゝすすま
のひゝ心乃ゝ〻よゝつゝふかすり流ゝ云ふ物を
きゝ事ゝ

一 文字遣つゝゝ云事なるき字二つにあきゝ付ハ
前れなるき字をゝうゝひゝさきゝゝやゝくれにあ
けハ詞ゝうゝをゝ文字遣りといへり

一 あけゝ二つある曲事をゝ二波曲事と云なるき
曲事ふあるゝ物ゝゝ事ふ細ハなるき曲事ゝゝ
ふひゝゝありそのもゝとあるせすきたなるあけ
をゝと二つよさゝめそれとてきよゝて曲事れ
伝と宮ゝゝめのあ者ゝハおり後れあけハ
かゝくわくはをも陰れゝ也別あけゝ

所位をもつめ字二つ三つかなをきりてと上投字
引くるをとかろく地へうちとそをゝいとあけハ
きゝうそをしたく地まてをもきてはくなりひとを
ふうけ所要くに他り地儒ひさくとゝかくあり
ゝ又あけハまてわるくへ上と一大事とあけハ
あくくとへハ無別乃位よりそひきむさときてハ
物になるし

一和方代儒やうをもつめしとハくるく物ゝにハ海

一もすかるくとなゝ薬のうちすきるんあり
てゝ儒あり後二つ三つ上てそのすくを
すといへつあまりむまくのとハ物ゝのゝ
ものゝ

一儒をくへ打きくする示のす儒をくへてもり穀
物ゝをそうきくれ事あり方ハ儒ゝくすす
をくよけきくへうけさうゝ物ゝをゝのゝ

一儒そこなひハ示れ事人法けゝを主へうり

一 ゆく〳〵前れつまりて竹と篠なとさわぬ
を初んのうわ〻こうひとこゑひとてきこと
こゑのおもしきこ高舞の事とおりしいてさ
きとたゝみしへ〻事こうとすれもとへと後を
ふてきまりあし

一 口月朝日とのく卯月八日なとの篠雲長れ小
こうひ花に山

一 小篠乃こうひつまりわ西こととふ高寺れより

一 篠ゆ〻ゆ〻きてこうふてすそのまり松ゆき
とハ三さ三ゆこれ附にいうこうわりいけまの小
篠を同前こ

一 音曲変ゆ口伝 一調 二拍 三聲
調子とハ拍ゆ打こ吟西乃調子と称りてきた
合を海て月とゆこきていきこうこうへひきて
拍変をゆせこうこきて調子のゆうもあるこ
調子こうこをれうてきた合すて変とゆ

ぜはこゝろき例よあふるゝさうをく例よとい撥よ
こゝて参とあとゝ教と一例二撥三参とふさゝもしと
又三例よとい撥すてもちゝ参とい例よすてあゝ
文字とはくちしるゝふてしるゝ文字みも
からねなくの曲とふかれりゝとんあいさゝ
ねゝ毛詩云 情餐 於聲 聲成
文譜之音
一変徳ふ赤ん口とゝ事ありゝ河異しあし

次第に地ゝ付をつけゝれ事一人ゝ
ありしあゝ人付ゝ赤ゝゝくちくは
けねゝ一人付人を例よれちひあゝふ
ゝて付ゝ参すてけねゝかゝ
ゝれ事目の前よあき事をれもゝ心
て付人ハまれ和稽のすゝんすゝあく
付へゝ変もきとうしゝひきとゝ
事あり又きてもきふくきゝ

一曲ふを海てすかゝなる名りふくゝかゝる守ふ字
ふ海りハ口伝ハ大略てふとあるなゝ
なる海つゝと云事者如乃うちすて分一れきて
ふくき拍ゝよくゝふりかけてたゝみむへし
一儒よ説云ゝとゝ如くれ教のゝうちを志る事
呂律二りゝ有ゝ呂と云ゝ呂ゝ
教ゝ有ゝいきれ教ゝ律ゝ云ゝかゝるゝ教ゝ
ゝ云ゝまりうんゝと心ゝへさやゝみ説云
れ教ハ技ゝ体ゝ行ゝ義ゝ心ゝ教ゝ付ゝ有ゝ教
なりゝ用ゝ言節ゝ呂ゝ呂れ教れ生ゝ称ゝ
義ゝゝゝ作ゝ教ハいゝゝゝ教ハ義ゝ
ゝゝ呂れ教悦教ゝ純ゝ説云分一ゝ
れゝれ教ゝ云声ゝ体ゝ技ゝゝゝ
なりゝゝゝ心ゝ義ゝゝゝハ入いき
れ心ゝ呂律れ儀義ゝ志ゝ称ゝ純ゝ
也ゝ有ゝゝゝ説云教ハ技ゝゝ

例なれども事をくせとせしに引くと撥をゆ
ぶくるり反に例なれども事をくせとせ
一謡小曲章とは一道より出るゆへよたる例ハ
黒白ハうりめあるを紙に文字ふし曲ハ章と
云へとり出るをとひとを云ふ曲章と云ふと
ハ別なくせありと云へしけうりこ云ふくせ章
を抑ふ紙をひと品謡ハ声ふ体と抑ふ抑ふと
ハ申いなへとり紙ハ曲章ハ抑ふ体をとるゆへ

小章と云文字と曲よハ云へとりさて曲章
せいへうさたらくふつさこ風体ふ有る音
数之紙い云ハ各別れすそと曲章と曲章れ尚
道とあ反れくふ事ハなりしと近代曲
章と反ふけて小謡にあ付てうへと
こにくに面白くきこゆるゆへよ尚附と付
文曲章れ有ふ変れりてあるひと多れと
ハ已ハ文さるかくれ能よ曲章を謡有ふ

によりて此曲あり又殊にもてあそひし也さて
ひけの曲舞の曲さいさまかれに曲舞なりの
ころきと屋ゝけうたふ地にならゆく小曲也
道かはゝちふ事をさて寸曲舞也わらさえ
能も面白き事なんすてされとも花をひゝ事とも
申さぬ之さりゐらら此かへりめをさてうさ也
こともろへき道をとてとろへきことゝ師にたへ
ゑゐふおへき事本意をそむく文拍曲舞謡

はかまりめしらへて曲舞拍子を舞よりて曲道
また文字をは拍子の拍子によりて文字をも句をはかり
ものゝ縁し文拍子にひかれてよろしからす不し
なをゝ正なりされともひとつのさまよ聞て面白
き風躰も拍子は面白きにあうて殊さらによりて
ておなしやうのことも一節のかゝりをよくきこへゆきて花を
曲舞かゝりは風躰とこそ只謡とおなし拍子にて
かさりの事もなく只ありのまゝにうたふゆへは文

宮れ正まきれとさうかとよ徳れすいるかあるハ
きてさうとたる云とうきて一句一曲に至ますて
耳ふとなして心とたゆめうたるかへをきくへをも
同じに一曲れうんにとうすれたきたる感と毛詩
云

正得矢動天感鬼神莫近於詩

示くといへはもは感之純とまうんなるうゆへふ
とくたりとあるとまいふ分んとおとろう守

うんと天地うこうすと云れきと屋とうとうふ
と鬼神とうんせるもうというう純ふ海とれ
正用とはあるくさすれゆへに文字も白うつ
つもを西之とものよとれるとと云しは正とよ
くいうとうと正しむうんこれと考へあやと
みとと云事之と
一強に白はきいきはさと云事一字というと
一字といきにもうあり白はきと云うち

ゆかきいきとけうそたりといひて傷ありとを
白はきしと云こ
一大臣ときは少分赤絵仕たてまして山伏ときき
ひく日次第道行れまする上より
一僧ときはひひ上より同次第道行ひより
一男ときは中まして同次第道行中まして
一さて男共今ゑてまして同次第道行中より
一ちうの傷さて男雑ぞて傷りとて上より
一せうさて中より
一かへして上より
一山伏さて上より
一物くひより
一もの字けとくこさて行面時のす
一さんさんさて五とは一年きはくはすくあり
一さんは中なる物くり一さのふさんの下
一のはさて下一めはおいこさんより上
地氣と上ニテ
青黒氣と上ニテ
微ふ下へテ
面ふとくり
さわ氣とあり紙
文字入之事
やう二ケ条

一くせの方ゝとたやうたしの事

一そのゝちふうつを語へしきれ語く

けすかゝうへしそれ御ふ事ありしきの

かゝりふもいろくゝ事

一女はかゝりいたをるやうたつくく御へ

一他ゝくゝいるゝ心りちちふ事

一男はゝりそしゝうくゝをかゝへゝゝりゝう

ゝきしあゝそをもわゝくゝひとちゝふ事

一ひゝめんのかゝりゝ事一うたくゝをなきやうよた

みむへゝ

一箱ものかゝりもいたにこひてあゝくなき

やうよかゝへゝ

一いくゝゝかゝりゝはいたにうくゝかすよ

けすゝ成なよかゝへゝ教ゝも品とゝん

一うゝんとすくゝかゝゝ

一弥ひゝと佛法ゝいたにゝん高高

に御命じ

一はきの物をいとなみ人のようさまたてまつりとのゐ物語
のさまをみるにいとゆゑ〻しくはしたなくもあるまじ
んとぞおぼしたりあるまじうまた人の物
くるしきを書にかれおもとうしろ
ゆびかしこまり物思ひのきやうらんと有る間
他佛称れどうぜん海与人合て物よ
くるまをかくるまをそれ又いうにもあるくとは

すこしとかくすると海ゆくわらんと何を祈れる
くらいはうんすると

一つきさそに強うけやうの事女れうい児者れ
ようひなと成いうにもさやうにあるくしき
すとさりさるるのんよどひけると

一上人をのうきよさそ志川のとなるうきと
のごとひけその必れるの
一き人言人人のごとひけ不常れ世れとうの

一 まくらにも何の一ツ連もにげなき物をとれさあ
つゝくへしをよく志らせとすなんすること作文あまり
にせすくせは志かりて書物を儒あひつけん之人
まれなり
一 鬼神に物云事是いかにも大事なり流はよくと
おりし頼みをせずまたしやうにこひつけへし神へと
志んよ謹めて言葉をおすすめへし鬼へはさくらんこと
一 かさね事との志やにはさしまりれ謹つけはいかにも志ん
ふんをすまして たゝよく謹むへし
一 たいりならうさとの志やにてきゝ洛のの人なとは謹れ
いひつけちかふへし何の連も能と云は世界の物ま
なれともそられちかいらぬやうにこと能なくへし
一 家人うちみりの事にも物いひもう事是文世と
に常にあつさうれこしさりなりつゝきたる能
よそあるいは別あるへし
一 まいるへし夢中の人なとへことを気をおすすめすり

一大事くゑかの口伝のこと

一せきりやうのこきいうにも志をまれんりち

はなしとしてこの事

一人あり人をいうにも志をまれぬりちはく

あくまでこの事

一いろ〳〵さまこの事をやさしうかの志を有

すきやき僧を信雲の上人かいふ〳〵

きこうしいとあきけてわこの心持と

一相相乃とそはひとひけやうこうわせをもて

たなやうにこの事ちんよりこひけこへあわ相

ものそれ表よりいとてしきこいこにあり寸之

心持なり

一大文字遠松右のこきれそれ〳〵れ志そに徳加

けやうれしりち同お

一曲にな海の事ちいこうあす文字

多海りはこうし文字なまり〳〵中ハ一切れ文字し

正遠へしと申すとかなゐつとてにはの
一 うるの字れをくへてにしの字れ正いひひるすと云
義乃字れ正しきにもりて正よちくゐともかくに
よ字れしくうかすくくしくうかすくくしくうかすけて
口伝をへしるる如義ふれりれ事ふれと
けもしかれれれるり假名れ正いちくともかう
かうさまれいうかうかすくくしくうかすくくしくうかすけて
八乃文字れ変じ物る儘といふ為とよふふとうと

一 ゐねへまるの文字のうちをひくつめひきれと
まふれ字ふて多くへしかう大略ふたに
ありかへ

一 せまふの事ふ変れせまふきれ物まてふちふ
へ和云へれあいうい同おくふ変ハ物ふうにあひ
一 うちそうきいるふも細やうに云てすしく
一 鬼れ変乃河いうにもりのよとおといれれ
一 ゐみうふるふ

一世れ文字のくしいふもとをやうにまへ
一ゆくすの祝いうふもこひてくふ
一物くすひの文いうたも書ゆに仮ゆすくく
たへ〳〵徳をんようふかあるよりすい
一かれわくるもの文いうたもをんよ心と書書
ふりそくたへ〳〵元徳換心物のるひと
くくをれくの他のうんすくく
一物別のうきをそへくくいうたもかり

ゆかりせと書ゆうはゆき事をなくゆすく
光くふかりうき徳をくはくありくくせ徳
くけををきてのきすくとなとへきやうなん
いふもくうきの徳れねくきそあき事一こくく
くくかくく徳くけ事あんすくと文とくさ
と徳水きハ立きくく別ふさくりてきこゆ
ゆ事一のよりれはくくもくん所家く
一字をくり二字をくり云事あり一字徳二字め

と志りとゝ一字志りとそくるゝれんと又二字
志りとゝハ二字祖て三字めとくるゝ二字志ハ
つとゝゝて宜一れあるきゝ
一三字さかり三字あり三ひきとゝも皆あるゝ
物ゝ丸事すてハ三字ありとゝハ三ひきいて
くりあるとゝ奉へし祖ひくゝしたる宜一
きにくき物と先大ハきゝ物すゝ三字さかりと
ゝハさかりゝれ三ひるゝ三字さけゝるゝと三字

きりとゝ大にきゝハ物ゝ三ひきとゝハひく
物ゝと三ひるゝひあるゝと三ひきとゝ繼れ孫
ゝくゝ志ゝるゝ增祖ゝこゝの外きゝ物ゝ
何もゝゝ丸事れるゝハきゝ同れゝて
きにくゝゝとゝくゝ志ゝるゝくゝし歌のおも
ゝ
一祖ゝあるものてにたの事ハきりそゝるこそゝ
れ屋ゝんとゝゝるゝ

一度変儒教なき所の風俗様れ事儒者を尊大
時れとこうし儒をもとめるものの
一同音れはけあひのすく様子のハけすく分七
きんかあひきを述懐をものいふるもはなく
分へしこうりつくれ未をと分様かんを
ありいたをかあるをこうくく分へ之を鬼か
たのけをあひいたをはなくたるに行者に
ゆをそれくれはをあひれ心りちんすを

一ときをへしんしくるなたにうきの謡紙
きくちくとやをもりの事ありは時れ儒様うき
やて学ぶて儒をさきくこひ変へ儒うは一
をもるひこか様れ事行へも学不はたくひれ
能ありり

一音曲をとうくんとたをいふをそ事をいふもを
つくく風をつをきて音曲をとうくんをそうはいれ
かをくさすと儒うへくく音曲の位をなきこをのあり

国立公文書館
National Archives of Japan

はべき曲とうたうん」と申せば、家と仰くよ隠者

ひと訓れ抜き八十五ケ条はそよ孔子の大旨

をもちゆくあらさ事あまりみるを愛しうち云

一 百稜とをりて一稜を分かてこ云附ハ奥乃絵ハ

なきてきこえいか稜れ事を人あまたをり

こゝろうくふ我をくとさゝへて右の偽書

をいたつらよ成ト云うく秘書とハいふ尾

一 行くあくかくとをひおしくと寸

国立公文書館
National Archives of Japan